

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第49号（令和5年8月）

あゆむ「今日は、板碑だって？」
ミドリ「そうよ。久しぶりね。楽しみだわ。」
あゆむ「それで、今日は、どこ？」
ふみお「長清水だって。」
あゆむ「長清水のどこかな？」
ふみお「お寺の、“圓通寺”さんだ。」



ミドリ「山門の右に大きな石碑が建っているわね。」
あゆむ「これが、今日見ようとした板碑かな？」
ふみお「いや、この石碑は“長清水 開村三百年記念碑”と彫られてある。」
ミドリ「開村というと？」
文じい「旧町内の長清水村のことじゃ。」
ふみお「あ、そういえば、昔、人々が移り住んだと言われているよね。」
文じい「そう。『長清水の歩み』という記念誌があるが、これに碑の写真と、圓通寺の当時の吉田宗元ご住職の碑文が載っている。」
ふみお「昔、松山で紙漉きをしてくらしていたのだけれど、寛文9年(1669)に、土岐頼行公の命令で、ここに移り住んだとあるね。」
文じい「そう。土岐公は、北側の人々を北町に、西南側の西町の人々を今の長清水に移らせるなどして、城を中心に、武家屋敷を周りに置くように考えて、城下町をつけたんじゃない。」
あゆむ「なるほど。でも、移った人々は大変だったろうな。」

応安元年板碑

圓通寺(長清水)の

おうあんがんなんいたび

えんつうじ

文じい「ふむ。西町は、もと、漉屋町とよばれていた。水がきれいで、人々は紙漉き、つまり、紙つくりをやっていた。今も、長清水と言う地区名が残っている。おそらく、その地区名をこちらに来て名づけたのではないじゃろうか。人々は、住み慣れた地から涙ながらに立ち去って来たそうじゃ。そして、日夜、荒地を開拓して村づくりをしてきたということじゃ。」



ミドリ「しっかりおじぎをして山門をくぐらなければならぬわね。」

あゆむ「中にいっぱい碑が建っているけど、どれが指定の文化財の碑かな？」

ふみお「あ、あの説明板が立っているものかな。」



ミドリ「そうだわ。種子が、阿弥陀様のキリクと、観音のサ、勢至のサクで、弥陀三尊だって。そして、應安元 戊申八月十三日。」

ふみお「この“應”という字は、今の“応”の字だね。南北朝時代の北朝の年号であるこの応安があるのが貴重なんだって。」

ミドリ「南北朝時代というのは？」

ふみお「鎌倉時代の後に、朝廷や武士、寺社が南と北に分かれて対立した時代だね。」

あゆむ「ふうん。それで争いはどうなった？」

文じい「統一されて、室町幕府ができ、室町時代に移っていく。山形の方は、北朝側の斯波氏が治めるが、北朝の年号から、この辺にもその勢力が及んだことがわかる。」

ふみお「ところで、説明には、追刻ということばがあるぞ。後から刻んだということ？」

文じい「ふむ。実は、これには“馬返し伝説”というものがある。」

あゆむ「えっ、何？それ。」

文じい「近くに川があって、村民はそこで馬洗いをやっていた。ところが、ある地点に行くと、きまって馬が転倒した。そこは「馬返し」と

呼ぶようになった。享保3年(1718)8月、不思議に思って調べてみると、川底に大きな石があった。揚げて神様にうかがうと丁重に祀るよというお告げがあった。そこで、このことを側面に刻んで再建したという話なのじゃ。」

ミドリ「ふうん。側面と言うのは、ここね。」



ふみお「なるほど。享保三年とか、村の川中とかの字がわかるぞ。」

文じい「ふむ、享保三年までで、351年とある。享保三年は1718年で、応安元年は1368年じゃ。数え年で351年になるの。」

ミドリ「このお寺も古くからあったのね？」

文じい「長清水村移転の以前から、街道往来の人々の道中安全を祈った辻堂が、もう少し東の方にあったという。村移転後、村内安全の守りとして堂庵を修理拡張し、本尊の仏像も新しく安置された。現在の本尊の干手観音菩薩像は、“元禄五年 壬申 梅津三右衛門”により、寄進された。」

ふみお「寺を中心に、村の人々が努力をしてきたんだね。」